



|                  |                                                                                       |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 勇敢なるラッパ手を讃えて：連環画に見えるその形象                                                              |
| Author(s)        | 藤井, 得弘                                                                                |
| Citation         | 連環画研究, 2, 62-74                                                                       |
| Issue Date       | 2013-03-10                                                                            |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/2115.98393">https://doi.org/10.14943/2115.98393</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/98393">https://hdl.handle.net/2115/98393</a>     |
| Type             | departmental bulletin paper                                                           |
| File Information | renkanga_2_62-74.pdf                                                                  |



## 勇敢なるラッパ手を讃えて ——連環画に見えるその形象

藤井 得弘

### 死んでもラッパを……

日清戦争のとき、死ぬまで進軍ラッパを吹き続けたとされる日本軍のラッパ手がいた。当初、この逸話が誰のものなのかは不明だったようだが、後に『東京日日新聞』によって白神源次郎のものであると伝えられ、それ以降、明治末年ごろまでは白神説が有力だったとされる。しかし、明治三十七年（1904）に教科書が国定化され、尋常小学校の修身の教科書にこの逸話が木口小平のものとして掲載されたこと<sup>1</sup>が大きく影響し、やがてこのラッパ手の話は、木口小平のものとして人口に膾炙することとなった。<sup>2</sup>

佐谷眞木人氏は、この逸話について、新聞記事に掲載された無名兵士の忠勇美談が、共通体験と



図1 国定第三期『尋常小学修身書』より

して日本人の記憶に刻まれ、歴史的事実となり神話化される過程に注目し、「メディアが社会の風潮を増幅し、人びとを単一の価値観に染め上げてゆく危険性をもつ」ような、大衆社会が形成される初期のあり様をそこに見ている。<sup>3</sup>

無名兵士の神話化といえば、建国以後の中国においても、そうした例には事欠かない。ある人物の賞賛すべき逸話が新聞に取り上げられるや、「誰々に学べ」というスローガンが発せられ、それはさらに様々なメディアを通じて拡散されていき、運動は膨張を続ける<sup>4</sup>。物資輸送の任務中に殉職した解放軍の若き兵士、雷鋒は、まさにその好例のひとつであろう<sup>5</sup>。また、前号の拙稿で取り上げた、国の物資を守るために水中へと身を投じて犠牲となった知識青年の話も、その類例だと言える。<sup>6</sup>

本稿では、このような事例のひとつとして、中国の戦争故事におけるラッパ手の話について取り上げる。連環画を中心に、その様相を窺ってみたい。

## 負傷しながらもラッパを吹き続けた兵士

連環画『ラッパ手の勲功(司号員の勲功)』(新美術出版社、1954年6月)は、朝鮮戦争時に活躍したラッパ手を描く。

ラッパ手の奇浩は、中隊長金仁甲の命を受けて大隊に赴き、中隊に届ける弾薬を確保する。その帰り道、敵のタンクに遭遇した奇浩は、手持ちの手榴弾でそれを足止めし、さらにはそれを乗っ取って機関銃を操作する。しかし、敵の銃撃に遭い、胸に傷を負ってしまう。一度は気を失った奇浩だったが、別の連隊から聞こえてきた「衝鋒号(突撃ラッパ)」で目を覚ます。傷は痛んだが、遠くに聞こえるラッパの音が小さくなり、そのラッパ手が力尽きようとしているのがわかったと、体を起こしてみずからのラッパを吹き鳴らす(図3)。人民軍の兵士たちは、高らかなラッパの響きに鼓舞され、次々に敵陣に突撃し、勝利を収める。

この話に登場するラッパ手の奇浩は、先に挙げた木口小平のように息絶えてはいないものの、「負傷しながらもラッパを吹く」という点では共通するものと言えるだろう。ラッパ手の活躍するこうした話は、戦時中の英雄譚として、珍しいものではなかったようである。

例えば、『人民日報』1960年10月24日には、「軍隊ラッパの持ち主(軍号的主人)」という題の記事が掲載されている。中国人民革命軍事博物館に陳列されている軍隊ラッパを前に、かつての持ち主である鄭起なる人物が、10年前の朝鮮戦争を回想するという内容である。それによると、このラッパ手は、片手にはラッパを、もう片方の手には銃を握って戦い、困難な戦況にあったとき、ラッパによって相手の動きを攪乱し、味方を勝利に導いたのだという。このようなラッパ手は、おそらく実際に他にもたくさんいたのであろう。

ちなみに、話の趣向は異なるが、連環画『司号員の勲功』と同時期に、別の仕方でラッパを用いて敵を欺いた、子どものラッパ手の話も連環画となっている。連環画『小さなラッパ卒、俘虜を捕まえる(小号兵抓俘虏)』(朝花美術出版社、1954年5月)



図2 連環画『司号員の勲功』表紙

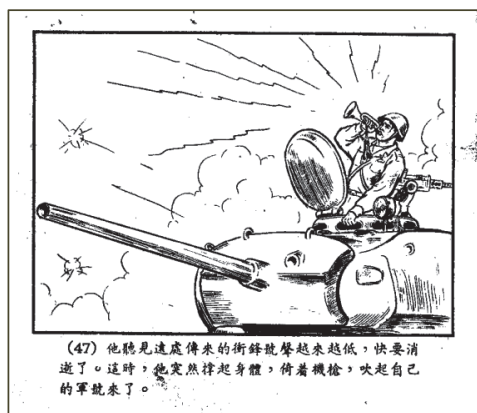


図3 力を振り絞ってラッパを吹く奇浩

もまた、朝鮮戦争の話を描いたものである。通常の連環画とは異なり、判型は 40 開と少し大きめのサイズである。

子どものラッパ手がアメリカ兵を見つけて追いかけるが、銃も手榴弾も手元にはなかった。そこで、手に持っていたラッパを、さも手榴弾であるかのように敵兵に投げつける(図 4)。勘違いしたアメリカ兵は脅えて動きを止め、ラッパ手はその捕獲に成功する。

いくらラッパを武器に戦う兵士であるとはいえ、ラッパをそのまま投げつけるというのは、いささか珍しい。ただし、このような、少年ラッパ手の活躍は、連環画にも数多く描かれているようである。次節からは、それらの連環画を取り上げていきたい。



図 4 ラッパを投げつける少年ラッパ手

### 小さなラッパ手

少年のラッパ手が活躍する話としてよく知られているのは、アニメ『小さなラッパ手 (小号手)』であろう。1973 年に上海美術電影製片廠によって作られたこのアニメは、黎汝清<sup>7</sup>によって劇本が書かれているのだが、このアニメ以前に、同じ著者による原作をもとにした、連環画『紅色小号手』(少年兒童出版社、1963 年 5 月)が出版されている。まずはこの連環画について見てみたい。

この本は彩色版であり、判型も 32 開で、連環画としてはかなり大きめである。コマにはとくに番号は振られておらず、見開きで描かれている絵もあり、一般的な連環画とは趣の異なる仕上がりとなっている。

この連環画は、革命歴史紀念館に陳列されている、ひとつの軍隊ラッパにまつわる逸話という体裁であり、先に挙げた『人民日報』の記事と似たような形になっている。その梗概は以下のとおりである。



図 5 連環画『紅色小号手』表紙

第2次国共内戦のときの話。小勇という名の、紅軍（共産党軍）のラッパ手がいた。小勇は9歳のとき、九里荘の荒れ寺に家族とともに住みはじめたが、両親の死後は、悪徳地主「山中狼」のもとで牧羊をさせられていた。

小勇は14歳の春、紅軍の来訪を転機として、紅軍に加わる決心をする。銃よりも背丈が小さかった小勇は隊長に笑われるが、隊長は小勇を励まし、彼にラッパ手をさせる。小勇は練習の末に本物のラッパ手へと成長する（図6）。

順調に活躍する小勇だったが、山中狼に対して雪辱戦を挑んだ際に負傷してしまう。鄭というおばさんに介抱された小勇は、回復後、紅軍の遊撃隊が駐屯する東の峰へと向かう。すると、山中狼の自衛団が国民党軍とともに紅軍を包囲し、殲滅させようとしていた。小勇は西の峰から突撃ラッパを吹き、手榴弾を投げて敵の注意を逸らす。混乱に乗じて包囲を突破した紅軍だったが、小勇は山中狼に捕まってしまう。

村人たちは、小勇を救出すべく、紅軍の遊撃隊に加勢する。鄭お婆さんは斧で小勇を救出し、小勇はお婆さんの斧を借りて山中狼を殺す。小勇は、捕まる前に隠していたラッパを回収すると、撫でながらラッパに感謝するのだった。

この話もまた、ラッパ手が負傷しながらも敵に立ち向かい勝利を収めるという内容だが、小勇が怪我を押してラッパを吹くといった場面は無い。小勇のラッパ手としての成長と、その活躍による敵の殲滅が、話の主要な骨子となっている。こうした点も注目されるのだが、とりわけ重要なのは、ラッパに関する描写であろう。

小勇が負傷後に鄭お婆さんの家のベッドで目を覚ます場面で、小勇は枕元に置いてあった手榴弾とラッパに目を向けるのだが（図7）、その場面は、次のように記されている。



図6 ラッパの練習をする小勇



図7 枕元のラッパと布を眺める小勇

彼は手を伸ばしてまだ枕元にあったその軍隊ラッパをなでると、彼の血は号穗（ラッパに結びつけられた布）へと染み込み、号穗をさらに紅く染めた。<sup>8</sup>

このように、ラッパ手がラッパを吹く様子以外に、ラッパのことが記されること自体、先に紹介した作品には見られなかったことだが、ここでは、軍隊ラッパの本体ではなく、持ち手に結ばれた紅い布のほうに描写が割かれていることが注目される。

この布は、少年先鋒隊の隊員の証である紅いネッカチーフ「紅領巾」や、古くから戦闘に用いられ、文革期には紅衛兵などが持った「紅纓槍」の先端に付いている紅い「ふさ」（図8）を彷彿とさせるが、どうやらこの時期におけるラッパの図像表現に共通するもののようである。連環画においては、文字による具体的な描写も伴う。

いま、連環画『紅色小号手』とアニメ『小号手』とを比較する前に、この紅い布のことを、もう少しだけ追いかけてみたい。



図8 ポスター「戦備課」（1972）。子どもたちの胸には「紅領巾」が結ばれている。両端の子が持っているのが「紅纓槍」。中央下の子が腰に帯びているラッパには、紅いふさが結ばれている。

## 風にはためく紅い布

少し年代が下った 1965 年には、連環画『雪山の上のラッパ手（雪山上的号手）』（上海人民出版社、1965 年 10 月、新 1 版 1972 年 8 月）が出版されている。こちらの連環画もまた彩色版であり、大きさも 28 開と大きめである。新版では改編が加えられている可能性も大きいが、いま手元にある 1972 年版をもとに話を紹介しよう。こちらもまた、「小号手」が主人公の話である。

長征のときの話。14 歳の少年于魯紅は、幼くして紅軍のラッパ手を担い、「小号手」と呼ばれていた。連隊が雪深い夾金山を越えようと進軍するなか、于魯紅は友人の江戦雲とともに雪に埋もれながらも行軍を続ける。しかし、途中で江は持病の発作で身動きが取れなくなってしまう。雪の中、隊から離れたふたりは身を寄せ合うも、やがて気を失う。



図9 連環画『雪山上的号手』表紙

目覚めた于はラッパで自分の位置を知らせようとするが、力が出ない。于は、毛主席が数日前に同じ場所を通ったことを思い出し、足をとられながらも懸命に進もうとするが、またも雪に埋もれてしまう。

折しも、別の部隊の隊長が近くを通りかかったところ、下山した仲間との通信が途絶えており、ラッパ手の存在を強く望んでいた（図 10）。于は、唇がひび割れて血が出ていたが、雪山の小さい高い場所に立ち、ラッパを全身全霊で吹き



図 10 部隊に助けを求める于魯紅 図 11 雪山でラッパを吹く于魯紅  
鳴らす（図 11）。その音は下山した部隊に届き、于は無事に合流を果たす。風雪を乗り越えた部隊は、ふたたび行軍を続けるのであった。

先に述べたように、この連環画は彩色版である。紅軍の旗や帽子の紅い星など、紅い色のものは、ひときわ鮮やかに色が施されており、とりわけ雪の白さの中では良く映える。共産主義や革命を意味する紅の色は、他の色とは区別されているのである。ラッパに結び付けられた紅い布についてももちろん例外ではなく、この連環画においても、特徴的な描写がなされている。

まず冒頭場面では、「彼のその小銅号は、一日中磨かれてピカピカに輝いていた。ラッパの持ち手にはさらに一枚の紅い布が結ばれており、背負うと非常に勇ましかった」<sup>9</sup>と記されており、紅の布が結ばれていることがここから窺える。次に、于魯紅と江戦雲が雪に埋もれてしまった場面では、「ただ于魯紅のラッパの柄についているあの紅の布だけが、一塊の燃え盛る炎のごとく風雪の中ではためいていた」<sup>10</sup>というように、ラッパの中でもとくに布に焦点が当てられている。これは、于魯紅が暴風雪のなかで遭難しながらも、行軍を続ける意志がまったく衰えていないということを、象徴的に表現したものと考えられる。最後は、部隊が雪山を乗り越えた後の、話の結末の部分であり、次のように記されている。

高い大きな雪山は、すでに紅軍の後ろへと遠ざかり、風雪の中の、于魯紅のラッパの上に結ばれたあの紅い布は、さらに鮮やかさを増して見えるのだった。<sup>11</sup>

この紅い布のはためく様子からは、みずからの活躍によって困難を乗り越えたラッパ手の、誇らしげな精神が表現されているのを読み取ることができるだろう。

さらにもうひとつ似たような事例を紹介しよう。連環画『一本の軍隊ラッパ（一把軍号）』（江蘇人民出版社、1974年12月）は、抗日戦争期に活躍した少年ラッパ手を描いたものである。

劉老荘の小民兵陳小保は、班長の呉志傑とともに合同訓練から帰るとき、突然百人余りの日本軍に襲われる。群集を保護し、敵軍を牽制するために、彼らは、側溝を縦横無尽に動き回り、軍隊ラッパを用いて相手を攪乱し（図13）、神出鬼没に敵を撃った。最後は、民兵と付近の群集が駆けつけ、敵軍を全滅させる。

この話でも、ラッパの持ち手についた紅い布に関する記述が見られる。冒頭部の一場面で、陳が歩く様子が、「光り輝く軍隊ラッパは、絶え間なく彼の尻をはたき、ラッパのくびのところに結ばれた紅いシルク（の布）は、風にひらひらと舞い、陽の光のもと、とりわけ目を奪うほどに美しかった」<sup>12</sup>と描写されている。

『雪山上的号手』と同様に、光り輝くラッパと、紅い布の目に鮮やかな様子からは、ラッパ手の意気軒昂たるさまを読み取ることができるだろう。

このように描写を追っていくと、ラッパに結びつけられた紅い布は、色の鮮やかさや風にはためく様子によって、ラッパ手の精神的な逞しさや、革命に対する強い意志が表現されているのだとわかる。つまり、そのラッパの持ち主が“紅色（共產主義的に正しい）”であることを示しているのである。

このような「紅い布」の最たる例は、国旗や共産党の党旗に代表されるような、「紅い旗（紅旗）」であろう。“紅旗”こそは、プロレタリア階級による革命の目印であり、共產主義の象徴である。そのことから、ポスターなどでは、しばしば旗の上に喧伝すべきスローガンが描き込まれたりもする。



図12 連環画『一把軍号』表紙

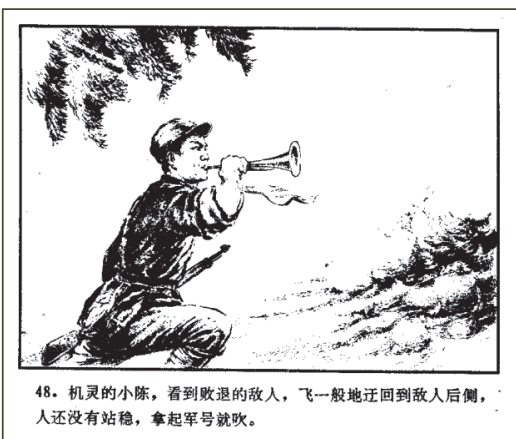


図13 ラッパを吹く陳小保。頬の皺がリアル。布が前方へとはためく様子は音の勢いを表すものか。

ここまで、紅い布と紅い旗との類似性について述べてきたが、それをより明確に表現した図像もある。

図 14 は、中国民間文芸研究会編『最初の軍隊ラッパ（第一支軍号）』（人民文学出版社、1965 年 9 月）という革命故事集である。16 篇の短編から成り、そのうちのひとつが表題作である。その内容は、「牛角号（牛の角でできたラッパ）」を吹いていた少年兵が、敵兵から軍隊ラッパを奪い、初めてそれを吹き鳴らして味方を勝利へと導くというものである。

改めて表紙（図 14）を見ると、ラッパにはやはり紅い布が結ばれ、ラッパ手の胸の前ではためている。その後ろには紅の旗が立てられ、これらは人物や背景とは区別されて紅く染められている。崖や高い場所に立ち、胸を張ってラッパを吹くという、これまでのラッパ手の図像に見られた構図のなかに、旗が象徴的なものとして描き込まれているのである。



図 14 『第一支軍号』表紙

### 連環画『紅色小号手』からアニメ『小号手』へ

ここまで、連環画『紅色小号手』をきっかけとして、ラッパに結ばれた紅い布に関する描写を追ってきたが、ここで、いま一度『紅色小号手』に話を戻そう。今度は、連環画『紅色小号手』からアニメ『小号手』（の劇本）へとどのような改編がなされているのかについて取り上げたい。

連環画『紅色小号手』の原作を担当した黎汝清は、この話のアニメ化にあたって、劇本を担当しており<sup>13</sup>、内容にも手を加えている。劇本の名は『紅色小号手』のままであるが、それをもとに製作されたアニメは、タイトルが『小号手』となっている。細かく見ると、改編された点は少なくないのだが、ここでは、ラッパ手とラッパの描写を中心に見てゆくこととしたい。なお、いま手元には、同アニメのコマに基づいて作成された、2 種類の連環画『小号手』（上海人民出版社、1974 年 6 月「上海版」／遼寧人民出版社、1974 年 10 月「遼寧版」）があるが、上海版のほうを適宜参照する。<sup>14</sup>

アニメの劇本におけるもっとも大きな改編のポイントは、小勇がラッパ手になるま



図 15 連環画『小号手』（上海版）表紙

での過程において、指導員やベテランのラッパ手による手ほどきを受けて成長するさまが描かれる点であろう。小勇は当初、指導員からラッパ手になることを勧められた際に、嫌がるような素振りを見せるのだが、指導員から、ラッパもまた武器なのだと諭され、ラッパ手を志すこととなる。この点については、連環画「上海版」の「内容提要」にも、「紅軍の指導員による教育のもと……(在红军指导员的帮助教育下……)」と記されており、小勇が教化されたことが主要なプロットとして位置付けられていることが窺える。そして、このことは、連環画の中身にも反映されている。

図 16 は上海版のひとコマである。指導員のもとでラッパの練習をする小勇の姿が描かれている。しかし、本来、アニメのこの場面は、小勇が指導を受けて一人前になったことを示す箇所であり、このシーンには小勇しか登場していない（図 17）。本稿の図版からは判別しづらいかもしれないが、そもそも連環画のほうは、アニメの背景に人物を書き足すという方法で作成されている（遼寧版も同様）。指導員は、その過程で描き込まれたということになるだろう。少ないコマ数で作品全体を描くという制限もあるのだろうが、それでも「指導」の過程は外せなかったのだとわかる。

もうひとつの目立つ改編は、小勇の人物像の変化である。たとえば、山中狼に捕えられていた小勇を、鄭おばさんが斧で牢屋のカギを壊して救出する場面は、アニメの場合、小勇は自分を縛っていたロープを自力で断ち切る。そして、最後の場面では、逃げる山中狼を馬に乗って追いかけて仕留めるが、手にしている武器は斧ではなく拳銃となっている。

当初、小勇は銃を持ちたくても認めてもらえず、指導員に軍隊ラッパもまた武器なのだと諭されている。このことは、兵器ではないラッパが、銃に比べて一段低く見られていたことを物語っているだろう（次節で取り上げる連環画『軍号長鳴』にも似たような状況が描かれている）。最終的に銃を持つことになったという変化は、小勇がより英雄的な人物として描かれるようになったことを示している。



図 16 連環画『小号手』（上海版）。先輩ラッパ手から指導を受ける小勇



図 17 アニメ版『小号手』の同シーン

ちなみに、おそらくはその一環と思しいが、連環画『紅色小号手』に見られた、「ラッパに結ばれていた紅い布に血が染み込む」というくだりは、アニメには見当たらない。血は「負傷」を物語るものであり、英雄的人物の描写としては相応しくないとされたのであろうか。アニメでは、その代わりに、小勇がラッパの紅い布を撫でたあと、中国共産党の党旗を想起する場面が挿入されている（図 18-21）。紅い布と紅い旗の類



図 18

図 19

図 20

図 21

似性については、先に述べたとおりである。ここでは、「血が染みこむ」という描き方とは異なるものの、党旗という、視覚的によりわかりやすい道具によって、小勇が共産党や革命へと思いを巡らせていることを表現しようとしたものと考えられる。

ここまで、アニメ『小号手』におけるラッパ手の小勇が、より英雄的な人物として描かれるようになったということを述べてきたが、アニメ『小号手』は、当時、模範的な英雄を描いた話として高く評価された<sup>15</sup>。こうした評価を背景として、アニメの劇本『紅色小号手』は、さらに連環画へと改編されており、原作どおりのタイトルで、『工農兵画報』1974 年第 17 期にも掲載されている。しかしながら、指導員や老号手による教化の過程は描かれておらず、ラッパや布に関する描写も見られない。そもそもコマ数自体、31 コマと少なめであり、話を短くまとめた結果と思しい。

さきほど紹介した連環画『小号手』が作成されたのもほぼ同時期であり、アニメの反響の大きさが窺える。こちらの連環画は、英雄譚を描いたその他の本がそうであるように、読まれるべきものとしてポスターに描き込まれることもあったようである（図 22）<sup>16</sup>。



図 22 ポスター「向陽院の熱心な人」  
(1976 年 7 月)



右下の椅子には連環画  
(上海版) が置かれている。

## 記憶から継承へ

ここまで見てきた連環画においては、ラッパ手はいずれも、負傷するなど何らかの困難な状況に置かれながらも、最終的にはそれを克服しており、犠牲になったりはしていない。しかし、連環画『軍号長鳴』（浙江人民出版社、1974年）には、朝鮮戦争の際に殉死したという、ひとりのラッパ手の逸話が挿入されている。

この話は、『浙江日報』に掲載された、凌冬による同名の小説が原作だとされる。同じ原作をもとにした連環画が、『工農兵画報』1972年第7期に掲載されており、浙江人民出版社版は、その後に出版されたものである。両者のプロットに大きな違いはないため、浙江人民出版社版を紹介しよう。

解放軍の某部隊に所属する司号員の江紅虎は、任務に疑問を覚えるようになり、あるとき、野営をしていた際に、就寝ラッパを吹く時間を一分遅らせてしまう。江は、父を追って解放軍に入ったのだが、大砲を使ったりタンクに乗り込んだりするわけでもなく、ラッパを吹かされていることに意義を見出せないでいた。

営長は深夜に彼のもとを訪れ、朝鮮戦争の際に活躍した、あるラッパ手の話を聞かせる。そのラッパ手は、仲間をかばって爆弾で負傷したのだが、総攻撃の時間になると、すっと立ち上がり突撃ラッパを吹いた（図24）。そのラッパの音は、兵士たちを鼓舞した。彼は鮮血で紅に染まった自分の軍隊ラッパを息子に渡してくれるよう仲間にお願ひし、そのまま息を引きとる（図25）。そのラッパ手こそは、江の父親であり、江が吹いていたのは、父のラッパであった。



図 23 連環画『軍号長鳴』表紙



図 24 負傷しながらもラッパを吹く司号員



図 25 血に染まったラッパを託す司号員

その話を聞いて、江は革命のためにラッパを吹き続けることを決意するのであった。

この話は、最初はラッパを吹くことに消極的だった主人公が、目上の人に諭されてその意義に目覚め、立派なラッパ吹きへと成長する過程を描いており、その点で、アニメ『小号手』（劇本『紅色小号手』）とも共通している。また、「血に染まったラッパ」というモチーフについては、連環画『紅色小号手』の「ラッパに結ばれていた紅い布に血が染み込む」くだりが想起される。ここでは布ではなく、ラッパそのものに血が付着しているが、これは、革命精神がラッパに託されていることの隠喩であろう。それを受け継ぐ江紅虎は、革命の継承者というわけである。

この連環画に登場する江紅虎の父親は、死ぬまでラッパを離さなかった、まさに木口小平のようなラッパ手として描かれている。しかし、単にその逸話を描くのではなく、父のラッパを息子が継承することを物語の中心に据えているところが、木口の逸話と異なっており、大きな特徴であると言えよう。

このような、紅い道具を継承するという物語は、1966年に指定された八つの革命模範劇のひとつ、『紅灯記』を彷彿とさせる。『紅灯記』は、日中戦争期の話を描いたもので、次のような話である。

共産党の地下工作員である李玉和は、党から無線の暗号表を届ける任務を請け負うが、日本軍に阻まれて処刑される。娘の李鉄梅は父の遺志を受け継いで任務を遂行し、日本軍殲滅に貢献する。

鉄梅は玉和の任務を引き継ぐ際に、彼の遺した信号灯を受け取るのだが、この紅い信号灯は、革命精神を象徴するものとして描かれるのである。

ここまで見てきたように、新中国においては、共産主義革命を進めるうえで模範となる人物が称揚され、その人物に学び思想を受け継ぐことが目指された。そのような時代の空気は、博物館に陳列された軍隊ラッパや、戦禍で犠牲となったラッパ手を、過去の遺物のままにはしておかなかったのである。



図 26 ポスター「革命を最後まで行おう」（1968）。上に描かれているのが信号灯を掲げた李鉄梅。

## 注

- <sup>1</sup> 図1は海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』第3巻「修身(三)」(大日本印刷株式会社、1964)より転載した。なお、国定教科書は第一期から第五期まで計4回の改訂を経ており、「シンデモラッパ ヲ〜」という有名な文句は、第三期(1916-1933)になって登場する。ちなみに、第二期は「キグチコヘイ ハ ラツパ ヲ クチニ アテタ ママ シニマシタ」となっている。
- <sup>2</sup> 木口小平については、西山宏『ラッパ手の最後——戦争のなかの民衆——』(青木書店、1984)、佐谷眞木人『日清戦争——「国民」の誕生』(講談社現代新書、講談社、2009)第三章「死んでも口からラッパを離しませんでした」を参照した。
- <sup>3</sup> 前掲『日清戦争——「国民」の誕生』第三章、111頁。
- <sup>4</sup> 模範的な人物の顕彰の事例については、牧陽一、松浦恆雄、川田進『中国のプロパガンダ芸術』(岩波書店、2000)第五章「アジア的専制アート——増殖する毛沢東」第三節「拡張と増殖」、武田雅哉『よいこの文化大革命』(廣済堂出版、2003)第七章「冬子のように!」に詳しい。
- <sup>5</sup> プロパガンダ芸術における雷鋒の描かれ方については、武田雅哉「雷鋒おじさんに学ぼう!」の図像学(『革命の実践と表象』、風響社、2009所収)が詳細に論じている。
- <sup>6</sup> 拙稿「毛沢東の遊泳と水中の英雄——文革期の連環画に描かれた知識青年像」(『連環画研究』第1号、2012所収)。
- <sup>7</sup> 黎汝清(1928- )、山東省博興の人。作家。1945年より八路軍に参加、1946年に共産党に入党する。49年以降は南京軍区前線歌舞団編劇、軍区政治部文芸創作室創作員を務め、1958年には南京軍区解放軍三十年征文組を組織し、文学創作に携わる。1979年に中国作家協会に加入。代表作に、児童文学『三号瞭望哨』(1959)、『海島女民兵』(1966、加筆版1972)、『万山紅遍』(1976-1977)、『皖南事変』(1987)などがある。龐守英編『黎汝清研究專集』(解放軍文芸出版社、1983)所収の「黎汝清小伝」「黎汝清著作懸系年」を参照。
- <sup>8</sup> 原文「他伸手一摸那把军号还在枕边，他的血沾在号穗上，把号穗染得更红了。」
- <sup>9</sup> 原文「他那支小铜号，整天擦得金光闪闪。号柄上还拴着一块红布，背在身上威武极了。」
- <sup>10</sup> 原文「只有于鲁红号柄上的那块红布，象一团烈火似的在风雪里闪动。」
- <sup>11</sup> 原文「高高的大雪山，已经落在红军战士的后面，风雪中，于鲁红那军号上的红布，显得更加鲜艳了。」
- <sup>12</sup> 原文「闪光铮亮的军号，不住地拍打着他的屁股，系在号脖上的红绸，随风飘拂，阳光下，格外鲜艳夺目。」(第5コマ)
- <sup>13</sup> 黎汝清編劇「紅色小号手」(美術電影文学劇本集『紅色小号手』、上海人民出版社、19??所収)。出版年は不明だが、おそらくアニメが制作された少し前であろう。
- <sup>14</sup> 上海版は黎汝清原著、林萱編文、遼寧版は黎汝清原著、単明改編。いずれの連環画にも、「上海美術電影製片廠供稿」と書かれている。
- <sup>15</sup> 『人民日報』1973年11月17日の記事「少年兒童が楽しく見聞する素晴らしい映画——彩色動畫作品『小号手』と彩色切紙作品『東海小哨兵』(少年兒童喜聞樂見的好影片——彩色動畫片『小号手』和彩色剪紙片『東海小哨兵』)」では、王金球なる人物が、『小号手』について、無産階級革命の継承者たる英雄的な形象を造り出すという方面において喜ばしい成果を出した、と評価している。ちなみに、同アニメは、1974年には南スラブ第2回ザグレブ国際アニメーション映画祭で一等獎を獲得している(孫立軍主編『中国動畫史研究』、商務印書館、2011、131頁)。
- <sup>16</sup> 読まれるべき本(あるいは取り締まりの対象となる本)が、ポスターなどにわかるように描きこまれることに関しては、武田雅哉『中国乙類図像漫遊記』(大修館書店、2009)「よいこたちの書物戦争……悪書のある文学史」に詳しい。